

【シンポジウム】

## 社会科授業研究の方法

— 關浩和先生小5「わたしたちの生活と情報」の批判的分析 —

Classroom Research in Social Studies Lessons:

Critical Analysis of Mr. Seki's Practice in the Unit "Our Life and Information"

(Elementary School Grade 5)

池野 範 男

(広島大学大学院教育学研究科)

### 0 問題の所在

社会科授業研究には長い歴史があり、その研究は授業研究と授業開発として整理されている(森分, 1984, 1999, 全国社会科教育学会, 2001)。その特質は、理論と実践を分離しながらも、方法論上で「可能性を開く」という意味の「批判的」であることにおいて一貫を持たせ、理論と実践を結合させている点や、基本スタンスが道具的、形式的な点にある。形式的な観点の方法論だけでなく、実質的な観点の内容論でも、批判的にすることが必要ではないだろうか。

批判主義の社会科、批判的社会科教育論(池野, 1999)は方法論とともに内容論でも、批判的であることを基本原則としている。この原則を社会科授業研究、とくに授業計画、授業実施、授業分析に適用し、社会に対するあらゆる子どもたちの関係を批判的にすることを目指すのである。

### 1 批判主義にもとづく社会科授業研究

#### 1.1. 批判的社会科教育論と授業研究の目的

批判的社会科教育論はその目的を社会形成に、内容を現代社会そのものに、方法を批判にしている。特徴は方法原理の「批判」をすべての側面に適用し満たそうとする点にある。批判主義社会科は批判原理にもとづいて、現代社会の認識形成とともに、その民主的形成も目標にし、同時的に遂行しようとする(池野, 2001, 2003, 2004a)。

また、批判主義社会科教育論は、社会科授業の研究を批判的なものによって自らを實現しようとする。それは、可能性が開かれた社会科授業研究にすることである(批判的社会科授業研究)。別言すれば、現代社会の特質を認識し、その特質を吟味・検討し、学習者がよりよい社会

のあり方を作り出す可能性を開けることである。

#### 1.2. 批判的社会科授業研究の方法

批判的社会科授業研究は次の3つの課題をもっている。①内容としての現代社会とその特質：その授業はどのような社会を取り上げどのような特質を認識させようしているのか。②方法としての学習の構造と原理：その授業は社会をどのように学習させているのか、その構造と原理はどのようなものか。③授業計画と授業実際の各分析：①②を視点にし可能性が開かれたという批判性の観点から各々を分析しその構造と機能を解明する。

批判的社会科授業研究は次のような手続きにより、①から③の課題に応える。

①内容としての現代社会とその特質の解明：該当の授業計画(あるいは授業)はどのような社会を取り上げ、どのような特質を認識させようとしている(した)のかに応えるために、単元、あるいはテーマにおいて取り上げられる社会とその特質に関する認識の可能な階層的構造を作成し、その授業計画(授業)の認識のレベルを確認し、どのレベルに位置するのか、可能性としてどのような新たな展開がありうるのかを究明する。

②方法としての学習の構造と原理：その授業計画(授業)は社会をどのように学習させているのか、その構造と原理はどのようなものかに応えるために、授業計画(授業)における学習構造を抽出し、その構造が認識形成の方法レベルとその原理を特定化する。その方法レベルはどのような可能性の位置を占めているのかを考察する。

③授業計画と授業実際の各々の分析：その授業計画(授業)の構造と機能を解明するために、①②の分析の結果によって、授業計画(授業)の現実の位置と可能な位置とを比較し、授業計画(授

業)の果たしている遂行的機能を解明する。

## 2 關浩和先生指導小5「わたしたちの生活と情報」の批判的分析

### 2.1. 小学校社会科の目的と5年社会科

小学校社会科は地域社会、日本(国家)社会、国際社会を主な対象にしている。3・4年で取り扱う地域社会では市町村、都道府県を中心にした行政区分的地域社会を、5・6年で取り扱う日本社会では産業社会、経済社会、政治社会、歴史社会を取り上げている。このほか、地域社会とともに電気や水道水などを教材にして公共社会を、日本社会とともにテレビやラジオなどを教材として情報社会を新たな教育内容に取り入れている。このような新たな社会も教育内容に組み入れ、小学校社会科で子どもの「社会的なものの見方や考え方が養われる」<sup>1)</sup>ようにしている。

平成11年学習指導要領改訂では5年の産業単元の内容の一部を「運輸、通信などの産業」から「通信などの産業」へ変え、「通信」産業を重視し、「国民の生活」への影響や「情報の有効な活用」を強調している。近年の情報化の進展に伴い、多様な情報通信手段によって膨大な情報が生み出され社会に供され「高度情報通信社会」<sup>2)</sup>(情報社会)が形成されていると説明している。

關先生もこの認識に立って、小5「わたしたちの生活と情報」の単元を構成し、「社会の見方・考え方を深める」ように組織している。

以下では、この単元を授業構造として分析する。

### 2.2. 「わたしたちの生活と情報」の授業構造

①内容としての現代社会とその特質の解明：情報に関する認識の階層性は図1のように、レベル

1：情報そのものとその種類から、その社会性の増大や拡大に応じて、レベル2：情報の形態と特性、レベル3：情報の社会的機能、レベル4：情報の活用、そして、レベル5：社会の在り方へと順序づけることができる。

5	社会のあり方
4	情報の活用(社会形態)
3	情報の社会的機能
2	情報の形態と特性
1	情報とその種類

図1 情報認識の形式的階層構造

この階層性は、情報認識の階層構造として組織できる。階層構造は、規則性であるために、いくつかの解釈や説明において成り立つ。情報の場合では、メディア・リテラシー論<sup>3)</sup>で説明されているように、情報の写実説と構成説となる。

情報に関する写実説と構成説という2つの解釈・説明は図2のように、作ることができる。この枠組みを使うと、關先生の開発・実践された小5単元「わたしたちの生活と情報」は、学習計画において、レベル4まで達したものである。小単元1「情報のはたらき」でレベル1を、小単元2「情報と通信」でレベル2と3を、小単元3「情報社会に生きる」でレベル4を取り扱うものとなっている。レベル4は「情報社会に生きる」という個々人の生き方の一環として扱われている。

また、情報認識の解釈・説明としては、実際の授業として示された小単元3においてTVCM教材

5	社会の在り方	実在の社会	観念の社会
4	情報の活用(社会形態)	社会の情報化	情報の社会化
3	情報の社会的機能	社会を写す	社会を構成する
2	情報の形態と特性	TV・ラジオ	TV・ラジオ
1	情報とその種類	ニュース	ニュース
		写実説	構成説

図2 情報認識の2つの解釈・説明

事例として取り上げていることから、構成説を考慮しているが、本単元全体では、情報が社会の事実を写し取っているという写実説を子どもたちに認識させているものである。

②方法としての学習の構造と原理：解釈や説明には、規則性ととともに、構構性が組み込まれている。教材や事例の学習は構構性があるからこそ、一般的な学習として応用性を持ち、特定の教材や事例の学習にもかかわらず、他のものへの転用、応用を可能にする構構性が学習されるのである。

關先生の単元「わたしたちの生活と情報」において特徴的な小単元2の部分を取り出し、その構構性を析出したのが、次の図3である。

解釈説		発問とその構構性
写実説	構構要素	○テレビ放送局は、どのように、なぜ、情報を伝えているのか 放送局（情報伝達主体） 社会の事実の情報（伝達物） ありのままの伝達（機能）
	物語構構	組織体が （わたしたちとは独立した） 客観的な事実として情報を正確に、速く伝える
構構説	構構要素	○テレビ放送局（員）は、どのように、なぜ、情報（内容）をどのようなものとして伝えるのか 放送局員（情報伝達主体） 作り出された社会の情報（伝達物） 社会形成としての伝達（機能）
	物語構構	組織体の一人一人が （わたしたちと関連して） 作り出された事実として情報を意図を持って伝える

図3 2つの解釈・説明における発問とその構構性

小単元2の主要発問は学習計画上「テレビ放送局は、なぜ、情報を迅速にかつ正確に伝えることができるのだろうか。」と提示されている。知識目標B、Cや下位発問のB-1～C-4を考慮すると、テレビ放送局番組の内容やニュース番組を取り上げて、その番組制作を調べる学習になっていることから、主要発問は「テレビ放送局は、どのように、なぜ、情報を伝えているのか」になろう。

このような主要発問に含意されうる構構性を析出すると、写実説側の構構要素と物語構構になる。それは、組織体としてのテレビ放送局がどのよう

に情報を取り扱っているのかを問題にし、客観的な構構として認識させるものである。

可能性としては、同じテレビ放送局を取り上げたとしても、その局員が情報を作り出していると扱えば、異なった構構となる。それが、図3の下の構構説の部分である。

実際の授業の部分も、上記と同様な要素と物語構構という手法を用いて、分析してみよう。

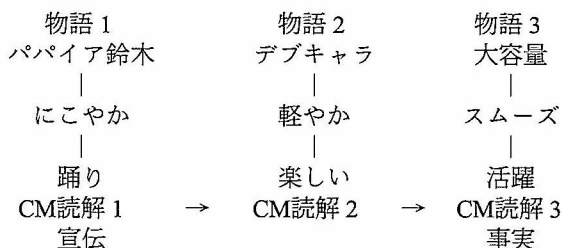


図4 学習活動2CM分析：事例AirHの分析（T19～T34）

実際の授業の学習活動2のCM分析では5つのCMが分析されている。Air HのCMは2番目に引き上げられる。授業計画によれば、このCMが3つの物語として把握されている（図4、参照）。第1の物語は、パパイア鈴木がパンツにAir Hを入れ、にこやかにダンスをしているというCMそのものの解釈。第2の物語は、パパイア鈴木は太っている、デブでありながら、軽やかに楽しく踊っているという別の意味の読解。第3の物語は、さらにコンピュータの物語として読み解き、デブが大容量、軽やかなダンスがスムーズな接続、楽しいが活躍するに意味を転じ、無線LANによるインターネット通信に関する新たな物語の読解となっている<sup>9)</sup>。コマーシャルの内容が宣伝効果として何を示しているのか、Air Hという事実がここではCMを通して、どのように作り出されているのかを読みとり、事実創出過程が見えるように意図されている。

しかし、実際の授業は、CM読解2、物語2の析出までであり、CM読解3、物語3の析出まで至っていない。

このほかのCM分析も同様で、先生の意図の通り、授業は運ばず、CM読解3、物語3を見つけるところまではどれも到達していない。CMのおもしろさだけで終わっているといえよう。

### 2.3. 批判的教科授業研究としての批判的分析

上記の①内容としての現代社会とその特質に関わる分析により、關先生の授業はどのような社会を取り上げ、どのような特質を認識させようとしているのかを、②方法としての学習の構造と原理に関する分析により、その授業は社会をどのように学習させているのか、その構造と原理はどのようなものかを検討した。

その結果は、規則性に関しては、情報認識の写実説を採用し、その認識形成のために、レベル4まで至る高い階層性を保持した高度なものである。しかし、構造化に関しては、客観的知識構造として、小単元1～3の整合性が十分ではなかったと判断される。つまり、小単元1・2は、情報認識の写実説にもとづき、テレビ放送局の示す情報について、正確で客観的な事実を伝達するものと把握させ、情報社会論を射程に入れたものとなっているが、小単元3は情報社会論を取り上げることがせず、情報認識の構成説にもとづき、生き方教育へ方向転換させている。

その情報認識の構成説も、CM分析では意図通り進まず、曖昧なものとなり、情報認識の構成論を子どもたちが学習する可能性はあったが、達成することはなかった。

### 3 結語

關先生の小5単元「わたしたちの生活と情報」を批判的授業研究の立場から分析した結論は、確かに可能性を開くものであったが、その開き方や開かせ方が不十分であったというものである。

不十分であった原因は次の3点にあった。第1は、授業研究のプライオリティが規則性に焦点化されていたこと。そのため、構造化が意識しぬくようになっており、授業の構造を整合化することを妨げている。第2は、情報認識に関する2つの解釈・説明、写実説と構成説が輻輳していること。そのために、授業の目的、子どもたちが学習すべき到達点が不明確になっている。第3は、学習内容となる情報と、授業方法となる学習とが異なった位相で把握されていること。情報は、写実説と構成説の異なった相で扱われ、それが、学習上では客観的な事実としての情報の学習と、構成された事実の学習という異なった相で扱われることとなり、

学習者の目指すべき方向が分散している。

改善策として、2つが考えられる。改善策1は、情報認識の写実説によって小単元全体を構成し、小単元3を情報社会論を学習するように設定する。つまり、CMの分析などによる情報の構成説を学習する部分を止め、現代社会が過度の情報社会になっており、それに対応することが各人に求められていることを認識させる。改善策2は、情報の写実説と構成説を2つの学習として組織し、対比させ、社会の異なった在り方を理解し認識するとともに、どのようなところでそれぞれが機能・作用しているのかを見出すものである。

### 注

- 1) 文部省『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版、1999、133頁。
- 2) 同上、68頁。
- 3) カナダ・オンタリオ州教育省 (FCT訳)『メディア・リテラシー マスメディアを読み解く』リベルタ出版、1992、菅谷明子『メディア・リテラシー 世界の現場から』岩波新書、2000、参照。
- 4) 新しい物語の創出は一般的には、コノテーションとして行われる。一次的構造が二次的構造へ包含的に転位することである。この転位の構造が、われわれの(社会的)世界を拡大させるのである。

### 参考文献

- 池野範男「批判主義の社会科」『社会科研究』第50号、1999。
- 池野範男「社会形成力の育成—市民教育としての社会科—」『社会科教育研究別冊 日本社会科教育学会年報(2000年度)』2001。
- 池野範男「市民社会科の構想」社会認識教育学会編『社会科教育のパースペクティブ』明治図書、2003。
- 池野範男研究代表者『現代民主主義社会の市民を育成する歴史授業の開発研究』(平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書)、2004。
- 全国社会科教育学会編『社会科教育学研究ハンドブック』明治図書、2001。
- 森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書、1984。
- 森分孝治編著『社会科教育学研究—方法論的アプローチ入門—』明治図書、1999。